

第3講 マーリック・ブン・ファハムの子供達と父亡き後の彼らの業績(p.101)

マーリック・ブン・ファハムの子供達は男子 15 人であると知って欲しい。一番目はアンヌビーで、マーリックは愛称で呼んでいたのだが、彼については歴史は何も記述していない。恐らくペルシャとマーリックとの戦が起こる前に死んだのか、他の場所へ分かれて行ったので、彼の情報は知られていない。アラブの問題が多かったからであろう。

ジュザイマ・ブン・マーリックについては、アルアブラシュとも、また彼が持っていた「明確さ」の故にアルワッダーフとも言われた。つまり人々はアルアブラシュからアルワッダーフに訂正している。彼は偉大な王であって、その期間は長かった。彼の支配はシャーム(大シリア)高地から東ローマ方向のユーフラティスに至っていた。アルハヌウカとカラキシアの間のアルマディーラと呼ばれる場所に降りたのであった。諸小王国時代の95年間、彼は生きていて、それはペルシャの諸王の一人アズダシル・ブン・バービクとその息子サービルとアルージュヌウドと同時代であった。その二人の時代に23年過ごしたのだった。彼の王権の総計は 108 年であった。歴史や伝記諸家の下での有名な話では、(ゼノビアの)ジバー女王が彼を殺した、とされている。

ジャマーズ・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、彼の名前は、ズヤードで通称名ジャマーズと称したが、彼はマアッド・ブン・アドナーン族の諸小国やイエメンの諸小国の王であった。しかし人々は彼の王権がどこにあったか語っていないものの、彼こそが神がクルアーンの中で、全能の神の言葉で述べている人と言われている。「彼はその友と議論しているとき彼に言った。」(*洞窟章 32)という言葉から「そのとき玉座には何もなかった」(*雌牛章 259)の章句までに。そして王として120年生きた。彼は、不信心で、不正で、傲慢で、頑固な専制君主であって、不信心と不正と専制の典型として格言にまで例示されている。つまり「ジャマーズより暴君である」とか、「ジャマーズより不信心」とか、「ジャマーズより不正である」とか言われる。

イマームが言っている。「彼よりも素晴らしくて偉大で、彼よりもマアッド(族)をより殺害した王がアラブを支配したことがなかったと言われ、彼の暴君ぶりと悪逆は海の一滴だ、と人々は語っていた。また彼の王権はアルアーリヤ(高地)の国々から、大シリア地方シャームの(ヨルダンのアカバ近くの)アイラの近隣までであったと言われている。またイマーム言っている。人々の下での彼の不信心は格言として例示されることになった。マアッド族に対する彼の残虐ぶりは、限度を超える程のものであって、マアッド族はその支配から出ることも、一言も彼に言うことも出来なかった。彼は誰であろうと彼が出会うマアッド族の者は受け入れなかった。もし彼に会いに来る者があれば、その者を悪の極みまで悪く扱い、最悪の処遇をした。それは彼がその者を扱った悪い扱い方他には、扱いの悪さの中で何も残らぬ程であった。そしてその烙印は、其の者の名誉を傷付け、その傷付きが又彼を傷付ける。大げさでなく、王の彼等(マアッド族)への執拗さはこの様であった。

ハナー・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、彼はマーリック・ブン・ファハムの子供達全ての中で最も聡明で、非常時に最も信頼出来、精神的に最も強かった。オマーンで最も重要な人物であった。読者には、彼がああペルシャとの民族的戦争で父親の右翼を担い続けたことを知れば十分と思うが、彼は、当時、スルターン的高潔さのモデルであった。彼こそが父親の後、王としてオマーンを支配した人で、住民を良く扱い、巧く、賢明な施策でオマーンを統治し、彼に対する反抗も起こらず、拒否する者も彼には拒否しなかった。オマーンの土地の一片も割譲することなく、彼の(統治の)日々が過ぎた。彼が弟王であるサリーマ・ブン・マーリックをペルシャの地で支援した人である。それで、弟王の支援が固まり、権威が強まり、王権が安定し、弟王に対するペルシャの騒動も静まったのであった。彼(弟王)の王権がペルシャで長期間続き ついには高名と栄誉のうちに彼はその地で死んだ。

サリーマ・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、父親を殺した-読者が事件をその理由と共に知っている様に-後で、ペルシャの地へ出たのだった。と言うのは、彼はマアン・ブン・マーリックを恐れていた。彼はジャースとして知られるジャースクに降り立ち、それからダーラ・イブヌ・ダーラ・ブン・バフマンの子供の時代に、キルマーンの地に逃げて分け入った。それは、(そこに居る人々)に対して、彼に適した美しい逃避場所を望んでのことだった。何故なら彼は自分の父親のマーリック・ブン・ファハム、即ちペルシャの敵を殺害したからであった。サリーマは、それが故にペルシャ人に近付き、彼らが--彼らの敵である自分の父親を抹殺したが故に--生命を助けてくれるような支援を彼に差し向けてくれたのであった。キルマーンに留まっていると運が彼を助け、運命は彼に好都合なものとなり、終に彼等(ペルシャ人達)を支配することになった。即ち彼等に压制

を加えていた暴君の彼等の王を殺した。(この暴君については、)王族の情報の一片として今なお存在する物語の中にある。サリーマはその地で国の貴族達の支援で王権の座に付き、人々が彼を妬むことのない様に気を使いながら、ペルシャ人達の中で生きていくことになった。人々が口にしたのは、このアラブ人は何時まで我々の王なのか、であった。(P.103)そして彼への抵抗に関心を持った。するとここで、サリーマは、彼の兄でオマーン王であるハナー・ブン・マーリックに助けを求めると、兄はそれに応えてアズド族のリーダー達の中から勇敢な男達を送ってきた。遂には送られてきた者達はキルマーンの地に定住した。キルマーンの地全体が彼等(の到来)で大揺れとなった。彼等の定住にペルシャ人の驚きが起こったのである。彼等がサリーマを椅子から引き降ろす代わりに、サリーマが彼等の家(ペルシャ人達の領土)の中に入り込んで、虐待しながら脅し始めた。既に彼の父親が彼等(ペルシャ人達)をオマーンから追放し、疾風怒濤で粉碎していたのだが。サリーマは、彼等を支配する権力を持って、その鼻を踏み付けるようになり、遂にはここキルマーンの地で死んだのであった。彼には10人の子供があったが、出来が悪い子供達であった。しかし子供達も彼の(死)後、それぞれに差があった。つまり、その違いの数々が、王位から外れる道と見なされることになった。

イマームが言っている。「彼らの中には、即ち後裔にアルジュンディー・ブン・カラカラがいる」。また言っている。「彼の子のアルシファークがオマーンを王として支配し、その後裔が諸王を継いでいる」。私が言ったのは、「アルシファーク王が何時いたのか私は分からないということだが、このことは奇妙なことではない。つまりジャーヒリヤの時代のアラブの情報は学問や文学者の合意事項では、特にオマーンにおいては、不明瞭と知られているから。アラブ人達の文旨ぶりは、クルアーンが証明している。と言う訳で彼らの情報が我々の元から去ったとしても不可思議ではない。恐らく彼は最後の時期に王であったのであろう。それは王が彼ら(一族)からアルジュンディー族へ移った日々だったのであろう。つまり両者の間に、相克と亀裂が起こったのであった。そして諸事が消えてなくなってしまった。個々の事にはそこで終わる極限があるものである」。

イマームが言っている。「ペルシャの地とキルマーンにおいて、サリーマの一族の人々は、オマーンのそれより多かったが、しかし彼等はその地(ペルシャの人達)に混じり合ってしまう、彼らを抽出させることは出来ない。サリーマの子孫の中でオマーンに来た者達は、少数ではあったが、オマーンで子孫を残し続けたのであった。

ファラヒード・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、マーリック・ブヌ・ファハムの子供達のうちの最も勇気ある一人と考えられ、ペルシャとの彼の戦いでは、父親の左翼であって、既に彼の勇気はよく知られ、その威厳が知られていた。父の時代を、射抜く矢(の技量の主として)生きた。彼の父親は、貴方が知っての通りの人で、驚くに値しない。彼も多くの後裔を従えていて、最も知られているのは、ファラヒード家であり、その中にイスラームにおける最も優れた学者であり、高貴なイスラーム法学者であるアルハリール・ブン・アハマドがいる。

サアラバ・ブン・マーリック・ブン・ファハムについて言えば、兄弟達がサリーマのことで意見を異にした時、兄弟達と決別した人であった。彼は兄弟達が父親の処にいるサリーマを妬んだ後で、彼の兄弟のマアンがサリーマを殺そうと謀っているのを見たのだった。あたかも彼の殺害が彼の手であるかのように。そしてサアラバは、母親がタヌーフ族だったが、タヌーフ族の母方の叔父達の処へ出向き、彼等の中に入り込んでいった。それで、タヌーフ族は皆の総意で、ジュザイマ・アルワッダーフのところへ行った。その時、ジュザイマはヒーラの王だったのである。彼らの中に居たサアラバ・ブン・ファハムの後裔は、今日までシャーム(大シリア地方)とアラビア半島に居ることになった。

マアン・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、彼はサリーマに対して最も強硬な人で、彼の血の贖いに満足しなかったし、その言い訳を受け入れなかったし、兄弟達の言葉に従うこともなかった。サリーマに対するチャンスを待っていた。つまり(父)マーリックが彼(サリーマ)の不意を衝く(事態になり)、サリーマが父を殺害することになった。しかしながら彼(マアン)はサリーマがオマーンからペルシャへと、彼(マアン)が原因で、旅立っていくまで、勝利を得ることはなかった。

アマル・ブン・マーリック・ブン・ファハムについては、オマーンで特別の情報はなかった。アルハーリス・ブン・マーリック・ブン・ファハムの子孫達も同様(に情報が無い)のである。そしてその後裔には北オマーンで人々に知られているシュフーフが居り、アブー・バクルの時代に施しを節約したのでシュフーフ(吝嗇家)と呼ばれたと言われている。彼らは次の様に言われている。即ちアブー・バクル、彼に神の慈悲があらんことを、彼の時代にサダカ(喜捨)を彼らが渋った時に「ケチ」とのニックネームを付けられた。彼等はアルハーリス・ブン・マーリック・ブン・ファハムの子孫達からの出自で、オマーンの民の正しい系統である。彼

等には彼等以外にはない言い回しがあった。彼らの間での言葉は独特のもので、互いに理解するものであった。彼等は古
いその時代から今に至るまで近隣の人々に関してはこの様であった。

